

京都大学	博士(文学)	氏名	岡 村 眞紀子
論文題目	ジョン・ダンの詩における修辞と思想 — パラドックスを中心として —		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論は16、17世紀の詩人ジョン・ダンの詩作品を、パラドックスを軸として読み解くものである。</p> <p>ジョン・ダン「パラドックスの詩人」として捉える視点は、次の3点において考えることができる。</p> <p>(1)ダンの詩が古典以来の伝統に則ったパラドックスそのものであり、また伝統の上 にありながらも、16、17世紀イギリスに特有のパラドックスの典型であること。</p> <p>(2)ダンの詩が、「パラドックス」の本来の意味「通説に反対の言説」を使った修辞 法としてのパラドックスを基盤に、懐疑主義、自己撞着、諷刺、自己諷刺の表現 となっていること。</p> <p>(3)ダンの詩が、彼の生きた16、17世紀イギリスの精神の表出であり、その時代精 神がまたパラドックスを一つの側面とすること。</p> <p>以上において、ダンの詩世界全体がパラドックスの表出であることを論証する。</p> <p>序</p> <p>パラドックスは古代ギリシアの哲学者の弁論術のひとつであった。Para(=against, contrary) + doxia (=opinion) の語の成り立ちのとおり、通説に反する見解を論ずることにより、一般に真と考えられていることが、いかに誤謬に満ちているかを明らかにし、真に真なるものを追求する論理を構築するものである。その伝統は古代ローマのキケロに継承され、16、17世紀のヨーロッパのパラドックスの規範となっていく。</p> <p>‘Paradox’ は、「パラドックス」のそもそもの意味「一般に認められた意見と反対の意見」であった。その後、エラスムスの『痴愚神礼讃』におけるように、諷刺的な側面が付加される。諷刺としてのパラドックスも古代ギリシア、ローマで発達したものであり、そのなかでも特にパラドキシカル讃辞として知られるものに、その最たる例をみることができる。この修辞は16、17世紀のイギリスの空気にふさわしく、文人たちはこぞって筆を揮った。エラスムスについて大きな影響を与えたのは、イタリアのオルテンシオ・ランディで、ジョン・ダンもその影響下に散文で「パラドックス」と「命題」を書いた。ダンの詩の一つの側面はこの手法と精神の上にあるものである。</p> <p>第一章</p> <p>『ソングとソネット』と『エレジー』の恋愛詩の修辞的パラドックスを分析する。 『ソングとソネット』は、恋愛詩群であるが、ダンは、恋、愛は言葉では語れない、</p>			

完全な愛は「否定の言葉」でしか表せないと言い切りながら、愛の詩を紡ぐ。その出発点からそもそもパラドックスである。「おはよう」で「それぞれが一つの世界を、そして二つで一つの世界をもとう」と語りかけ、「聖遺物」、「聖列加入」などで、君と僕は互いの元素、互いの中に互いが存在し、二人で一つ、どちらがどちらか解らないと説いた論理は、「エクスタシー」に至って、肉体から離脱した二つの魂は精妙に混合され、全く区別のつかない一つ、それぞれが完全な一であるゆえに、二でありながら一という論理に完成する。また、「聖ルーシーの日への夜想曲」では、愛する者は、愛する人の死によって「究極の死」となり、そこから再生して「原初的無の精髓」となる。生が死となり、死が生となるが、後者の生は無の中の無にして不死の妙薬ともいわれたエリクサ、すなわち四元素のこの世を越えた^{ケインテッセンス}霊妙な存在なのである。このように強い肯定が否定によってのみ表現可能となり、生の否定である死によってのみ愛も存在も完結する、二人の愛が一となり、さらに無であることで真実になると、パラドックスが積み重ねられる。「エクスタシー」では、完全性は肉体を超克した精神性ではなく肉体に戻って初めて求め得ると、先のパラドックスをすら覆すパラドックスをダン^{エリクサ}は用意している。

『エレジー』には、愛を謳歌する詩と、愛や恋人への懐疑を吐露する詩が共存するが、愛の謳歌も、それを否定する要素の内在から、それらが不安や懐疑に裏打ちされていることが解る。「恋人との別れ」では、綿々と綴った詩行の後で、それまでの言葉の全てが否定され、その後にさらにまた覆される。否定により肯定が、肯定により否定が巧妙に表現されるのである。また、まず一人の女性を愛し、次に、その女性のため一点を愛すると、「愛の旅路」では歌う。「一」は一部分であり、かつ全体であって、それゆえに完全であるのである。女性は四元素からなりたつ世界ではあるが、最上位のはずの「火」が地下マグマにあると逆さまの世界である。しかもこの旅路はそもそも出発点が過ちで、反対方向から出発し直すべしと、ここでも何行にも亘る前言が否定されてしまう。このような逆接・否定・背反構造に、ダンの懐疑と自己撞着が表現される。

第二章

『エレジー』と『諷刺詩』での、諷刺のパラドックスについて論じる。

『エレジー』の1篇「腕輪」における言葉の意味の重層性から、ダンの時代のイギリスと、イギリスを取り巻く列国が孕んでいたパラドックスを明らかにする。キーワードである‘angel’は「天使」と「エンジェル金貨」、‘satisfaction’は「贖罪」と「弁償」と、宗教的、世俗的意味をともに有している。恋人の金の指輪の「弁償」としての「金貨」が炉に投げ込まれて‘falne angels’「落とされた金貨」となるなかで「天使」は「墮天使」となり果てていくと、当時の貨幣経済に絡んだ宗教的、政治的、社会的世相への諷刺が表現される。この詩の最後の詩行では、ダンのウィットを恣にした諧謔的な口調と論理で諷刺のパラドックスが展開される。「もとに戻すべき」・「強心

剤」の二義をもつ ‘restorative’ と「愛しい」・「強心剤」の二義をもつ ‘cordiall’ を巧みに用い、さらに「強心剤」を意味するこれらの二つの同義語を巧妙に使いわけ、そこに金についての薬と毒との二説を重ねて、指輪を金貨で取り戻した恋人への呪詛を紡いでこの詩は終わるが、その呪詛も第一章の論理を重ねて読めばさらに重層的になる、といかにもダンの的と言える。

5篇からなる『諷刺詩』は、それぞれ、学生、法律家、宗教、宮廷人、訴訟人と官吏を諷刺の対象としながら、全体として1篇の「諷刺詩」として読める。第1諷刺詩で諷刺される ‘fondling motley humorist’ (愚かな、流行かぶれの気紛れ男) に象徴されるのは気紛れ、不身持ち、定まりのなさ、であるが、‘uncertain’、‘constant’、‘stay’、‘directly’ といった語を巧みに用いて、法学院の学生とおぼしき人物の定まりのなさを揶揄する。この学生は ‘whore’ (売春婦) に心惹かれて街にさ迷い出るが、その売春婦を競って負けて「まっすぐ」家に戻り、「じっと」ベッドにつく結末は、諷刺が鋭く効いている。法律用語を使って法律家を、裁判用語や宗教用語を使って宮廷人を諷刺する第2、第4諷刺詩でも、同様の語が巧みに組み入れられている。訴訟人、官吏を槍玉に挙げる第5諷刺詩では、高官たちは ‘Adulterate lawe’ (法律の品質をおとす) が、彼らを邪悪たらしめているのは訴訟人で、‘adultery’ (姦通) を許す寝取られ夫と同じと、最初の1篇に戻ってくる。高官は海、訴訟人は泉、そして水源は女王、そこから流れ出る川は法廷、金をつぎ込んだ橋はことごとく流されて高官の海に飲み込まれると、水のイメージがこの詩を覆う。水のイメージは第3諷刺詩にも現れるが、ここでは荒れ狂う川の水源は巨大な岩山の上に立つ「真理」である。第3諷刺詩は、キリスト教の諸宗派を次々に批判しながら、1度の ‘falsehood’ を挟んで立て続けに ‘right’、‘true’ を並べて「真理」へと登り詰めていく巧みな語り口である。『諷刺詩』は、中央に配された ‘Truth’ を中心として、その前後では人間の罪や墮落が諷刺の対象となり、真摯と軽薄、不実の緋い混ざった世界が ‘whore’ と ‘water’ のイメージで繋がれて、16世紀末の自己矛盾や自己撞着を抱えたロンドンへの諷刺の1篇となっているのである。

第三章

ドゥルリー卿の愛娘エリザベスに捧げる2つの周年追悼詩をとおして、中世と近代の連続性、すなわち中世と近代とを内在するルネサンスのパラドックスを論じる。

『第一周年追悼詩 世界の解剖』は、「彼女が死んだ」の嘆きの繰り返しの度ごとに解剖を繰り返し、彼女の死による世界の変化を知っていく。この構造は、序と結の部分を入れて7つの同心円を描く古典的宇宙像をなす。「調和」、「均衡」、「比率」と様々な意味の ‘proportion’、さらに ‘harmony’、‘colour’ の頻出が、彼女の死による世界の崩壊が美と秩序の崩壊によること、ルネサンスの価値観や美意識の崩壊によることを語る。また ‘circle’、‘round(ness)’ を重ねて円軌道の崩壊を歌い、新星の発見や、星々の消滅を歌うなど、中世までの世界観の崩壊を示す。つまり中世世界崩壊

の上に近代世界の崩壊が重なるところにルネサンスのひとつの相を読み取ることができる。

『第二周年追悼詩 魂の遍歴』も7つの同心円の構造をとり、‘*progresse*’をキーワードとして、先の追悼詩で崩壊した「世界」が「遍歴」することを歌い、2篇あわせて嘆きと慰めのエレジーを形成しつつ、ひとつのルネサンス観を展開していることを論じる。‘*progress*’は詩の中央でただ一度、大文字で始まる語として現れるのみで、むしろ‘*think*’、‘*know*’、‘*up*’が順に多用されて、その過程が‘*progress*’であることが解る。古代以来の知を並べ立てても人は自らを知ることはできないと綴るペシミズムの頂点で、天では天に関することを全て知り、その他は忘れると真の知を示す。この詩では死せる彼女が‘*vertue*’として、同心円のプトレマイオス的世界を‘*progress*’する。ここには、中世的世界観を保ちつつそれ自体が崩壊し、近代の先駆けとなっていくルネサンス像が示され、両追悼詩でルネサンスのもつパラドックスの表出をなす。

第四章

宗教詩と葬送歌から、16、17世紀イギリスのキリスト教のパラドックスと、死の思想のパラドックスについて論じる。

64行からなる1篇に32回‘*crosse*’が現れる「十字架」は、十字架像や十字を切ることの廃止を要求したピューリタンの千年王国請願提出に対して作られた詩である。

「十字架」、「十字架の刑」、「苦悩」、「十字架像」、「キリスト」、「十字架の形」、「罪」、「十字を切る」、「十字架に架ける」、「抑制する」、「調べる」と、異なる品詞で多様な意味をもつ‘*crosse*’を縦横無尽に駆使した1篇である。「キリスト（神）」の姿に創られた人間が、「全ての罪」を背負う「苦悩」の「十字架の刑」を侮蔑してさらなる「罪」を重ねてはならず、「十字架」の喪失は新たな「苦悩」と「罪」を背負うことになる。被造物の世界は「十字架の形」に満ちていて、自らが己の「十字架」である。だが、過度に「十字架」を敬うことは「抑制する」べきであり、一方自らに内在する「罪」と「苦悩」をもよく「調べて抑制する」べきである。このようにこの詩は内実は請願に反対し国教会を擁護するものであるが、そのみならず、人間存在に存する十字架（罪）をより大きな意味をもつ問題として底流にもつと言える。

『葬送歌』では、死者に哀悼を捧げ、讃辞を贈るが、そのなかで死の意味を問う。7篇の葬送歌の全てが‘*vertue*’、‘*circle*’、‘*reason*’、‘*soul*’、‘*sin*’を共通のキーワードとして、人にとっての死のありようと、死に対する人のあり方を歌う。人の生は死の一段階にすぎず、死の前には全てが無に等しい。しかし、この負の意義はそのまま、肉体の浄化と魂の解放という正の意義に繋がる。ヘンリー王子とハリントン卿への2篇の葬送歌では、人の理性と信仰と死の問題、そして宇宙論が、死者への讃辞とともに綴られ、他の詩篇と併せてダンの死生観、人生観、世界観が見渡せる。人知で図れるものと図れないものは、それぞれ理性と信仰を中心とし、世界はこの二つの中心を有するものとケプラーの宇宙論に倣って思考する。死は終わりであり始まりでも

あり、魂は徳を伝えるべく地上に留まり、アイデアたる形相を得て肉体が天に存在すると、ダンの死生観のパラドックスが歌い込まれる。

19篇の『聖なるソネット』は、「死よ奢るなかれ」が中央にあることから死がテーマであるといえる。その1篇の前後での死の意味の変化を考察する。前半は罪と絶望と救済をテーマとし、後半では妻の死への悲嘆と教会への懐疑という現実的なテーマに加えてキリストの贖罪がテーマとなる。肉体の死と罪の死から出発し、罰の死を受け、苦悩して流す涙はさらなる罪となり、罰が罪となる。死から改悛によって神に迎えられれば永遠の目醒に到り、最早死は存在しない、ゆえに死こそ死すべきものと、死の本質のパラドックスが呈示される。人間存在の罪深さに心を向けつつ神に救いを求め、キリストへの讃歌と信仰を綴る後半の詩群でも、悲しみに苦悩できるほどに弱くなるべく肉体を纏ったキリストの愛はこのうえもなく強く、立ちあがるためには、神に心を打たれねばならず、神に陵辱されねば純潔になれないとパラドックスが続く。その上にたって、被造物の最上におかれる人間が一番罪深く、その罪深い被造物のためにキリストが死ぬパラドックスが、『聖なるソネット』のテーマであることが解る。

第五章

16、17世紀に流行したパラドックス讃辞の頂点にある「無^{ナシング}礼讃」から、この時代の知の本質を論じる。神の「無」からの天地創造は西洋思想の根底をなすパラドックスであるが、この天地創造を基盤にして、人間が価値をおくもの全てが「無」との比較においてはその価値を失う。「無」にこそ価値があるのである。しかし、全てのものは「無」に帰し、全ての意味を失う。「無」は無価値なのである。歴史の中で価値を誇ってきた全てが「無」に帰してきたことも例証し、全ての虚しさを説くが、「無」に至ることに、意味と無意味が共存するところにまたパラドックスの真理があり、鋭い諷刺となっていることを論じる。

ダンの詩でも、神の天地創造と人間存在の「無」のパラドックスが基盤となる。しかし、ダンにおいては、「無」から創造された人間がまた「無」なる存在として表現される。さらに無価値な「無」としての存在に重ね、死による、価値ある「無」としての存在としても描かれる。さらに「無」なる人間の歩みは「無」に向かうものである。

「無礼讃」の諸詩が典拠にしたアリストテレスの「無から無が生ず」を逆手にとって、「無は無に帰す」とダンと言う。「死」をも意味する「無」であるが、死ぬために生まれることを告知されるキリストの誕生はそもそもパラドックスであり、初めと終わりの両端を一つに結ぶパラドックスでもある。また、愛と関連するとき、根源的愛にこそ「無」はあり、否定されるところにこそ真があると、「無」は一層の意味をもつ。ダンにおける「無」は、讃美され、讃美されることで否定される「無礼讃」の世界でありながら、そこに真が見える。「無」はダンのパラドックスの核をなしているのである。

結

以上のように、「無」を核とするダンのパラドックスは、恋愛詩と宗教詩とが一つに

繋がることで完成を見る。ダンは、異なるジャンルの詩の狭間で、聖からと俗からの解釈を用いて言葉や概念を重層的に使い、そこに現れるパラドックスから、時代や時代精神、さらにまた自己に内在する葛藤、懐疑を浮き彫りにする。それは諷刺詩、書簡詩としても表現されるが、すべてのジャンルを通じて、古典パラドックスの伝統の上に、縦横無尽な言葉や心象、論理や概念の知的駆使により、ダンならではのパラドックスを構築することになる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は16, 17世紀の詩人であったジョン・ダンの主要な詩作品をパラドックスの観点から時代背景をも考慮しながら読み解こうとするものである。ダンの詩にパラドックスの要素が多いことは昔から指摘されていたこともあり、テーマ自体には特に目新しさはなく、多くの先行研究もなされている。しかしながらこれらの研究も個々の作品や特定のジャンルに関するものが多く、ダンの主要な詩作品を網羅するものは数少ない。しかも論者は、先行研究や関係資料を駆使しながらも、安易に既成の説に従うのではなく、独自に本論文で用いるパラドックスの定義を *Oxford English Dictionary* にかかげてある五つの定義に求めたうえで、それらの要素をダンの詩が全体として備えていることを確認し、彼の詩作品を詳細に分析している。この点は注目に値しよう。

次に本論文の手法上の第一の特色は、テキストのことばの詳細かつ緻密な分析を通して、詩の中に潜む、多種多様なパラドックスを見だし、それらを再構築して我々に呈示しているところにあるように思われる。第1章では『ソングとソネット』、『エレジー』の恋愛詩の修辭的パラドックスを、否定表現や‘one’, ‘all’などを詳しく分析しながら論じる。恋愛は言葉では語れないと言いながら、次々と恋愛詩を書いていること、恋人の世界では、互いの中に互いが存在し、二人の愛が一つとなること、強い肯定は否定によってのみ表現可能であること、生の否定である死（この時代には性的恍惚の意味もあった）によってのみ愛や生が完結することなど、パラドックスが次から次へと積み重ねられていくさまが呈示されている。

とりわけこの手法は、テキスト中の多重の意味を有するキーワードを分析する際に威力を発揮する。なぜならばダンのパラドックスは多重の意味を有するこれらの言葉から生み出されることが多いからである。その顕著な例として、第2章の『エレジー』の一篇「腕輪」におけるキーワード、‘angel’と‘satisfaction’の意味の重層性を分析し、風刺としてのパラドックスを論じた個所をあげたい。ダンは、キーワードである‘angel’（「天使」と「エンジェル金貨」の意味を有す）と‘satisfaction’（「贖罪」と「弁償」の意味を有す）がそれぞれ相反するような宗教的意味と世俗的意味を有していることを巧みに利用して、恋人が無くした金の指輪の「弁償」としての「金貨」が炉に投げ込まれて、「落とされた金貨’falne angels’となるなかで、「天使」は「墮天使」になり果てるというパラドックスを示すことによって、当時の貨幣経済に絡んだ宗教的、政治的、社会的世相を風刺しているのではないかと論者は推測する。

このように、キーワードに内在する重層性の詳細な言語分析から、ダンのさまざまなパラドックスを読み解こうとする手法は、他の章にも共通して見られる。特に第4章の「十字架」という詩では‘crosse’の多義性（「十字架の刑」、「十字架」、「十字架像」、「苦悩」、「罪」、「キリスト」、「十字を切る」、「十字架に架ける」、「抑制する」などの意味を有す）の細部にわたる分析を通じて、この詩の裏に隠されているキリスト

教のパラドックスを読みとる。

本論文の手法上の第二の特色は上の例でも明らかなように、テキスト内の分析だけで終わるのではなく、分析結果を踏まえてその背景をなす時代や時代精神、宗教との関連にまで考察が及んでいることである。ダンは言葉や概念を重層的に使用し、そこに表れるパラドックスによって 時代精神や社会、さらに自己に内在する葛藤や懐疑を浮き彫りにすると論者は考えているからである。

以上見てきたように、論者はダンに関する先行研究や関係資料を駆使しながら、詳細で緻密な言語分析を通して、独自の視点からさまざまな相のパラドックスを考察していること、また多岐にわたるダンの主要な詩作品のほぼ全部を、パラドックスの観点から論じたものは日本では他に例がないことを考えあわせると、本論文は高く評価できよう。ただ、望むべき点がないわけではない。パラドックスの一点に焦点を絞って、ダンの詩作品を分析している結果、彼の詩の特色とされるウイットなど他の重要な側面が充分反映されていないため、やや一面的なダン像が描き出されている。また先に述べたように、本論文は、ダンの詩の背景をなす当時の社会、宗教などにもパラドックスの関連で幅広く言及しているが、背景に関わる記述は、テキストの精緻な言語分析に比べると、いささか木目があらく、説得力においてやや見劣りすることは否めない。しかしながらこれらの欠点も、論者が示した新たな知見に比べると本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお平成23年12月20日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。